

オバマ、マッケイン戦に宗教的論争はなかったのか？

池田 智

1. はじめに

本稿は、平成 23 年 3 月 20 日発行の立正大学英文学会誌『英文學論考』第 37 輯 pp.193-207 に掲載されたものに若干手を加えたものであることを、お断りしておかなければならない。

『英文學論考』が刷り上がり、手元に届いたとき多くの会誌に抜刷があるように、抜刷が数部でも届けられることを期待していた。だが、予算の関係とかでそれが叶わなかった。折角標題の講演を依頼され、その記録が掲載されたもののそれだけで終わってしまうのを残念に思っただけに、今回、多少の紙幅をいただけるとのことで拙稿に目を通していただく方が増えることに感謝して、寄稿させていただくことにした。

バラク・H・オバマ(Barack H. Obama, 1961-)が change¹ と Yes, we can. とをキャンペーン・スローガンに、有色人種として初めて大統領職に就いて早くも最初の任期を終えようとしている。拙稿に手を入れている今日は立冬。再選選挙までわずか一年しかないなか、オバマが掲げた change は「医療制度改革法案」を成立させた² ことくらいで、経済危機によって自治体が破産する事態にまで至り国民の期待を裏切っているようだ。現実には国民の 60% までがオバマの経済政策を支持しなくなってきたという。オバマが当選したときには、世界的な金融危機リーマン・ショックが襲ったときであった。そのためかオバマ、マッケイン戦に宗教がらみの論争が見られなかった印象が強かった。

アメリカ合衆国の大統領選挙戦と言えば、宗教的論争がいつの頃からか常についてまわるようになった。宗教的論争とは、家庭のあり方(family values)、同性愛の是非、同性婚(civil union)の是非、人工妊娠中絶の是非などの論争

や教育の場における進化論 (Darwinism) 対天地創造説 (Creationism) 論争といったアメリカ人の日常生活や子どもの教育に密接に関係することがらについて、どのような立場を取るか、といった論争であって、イスラム教対キリスト教であるとか、プロテスタント対ローマカトリックであるといった論争ではない。

こうした論争が大統領選挙戦についてまわる理由は、一つには、アメリカ合衆国の人口の 76.2% (2010 年)³がキリスト教徒であることが上げられるだろう。1990 年代の 86.2% に比べると 10 ポイントの落ち込みになってはいるものの、それでもおよそ 10 人に 8 人の割合でキリスト教徒がいれば、上に述べたような宗教的論争に関心を示す有権者は多いだろう。しかも、U.S. Religious Landscape Study の調査によると 2010 年の段階でキリスト教プロテスタント保守派の成人人口はおよそ総人口の 52.3%、カトリック教徒の成人人口はおよそ 23.9% と言われている⁴からなおさらのことだろう。

近年で言えば、ジョージ・H・ブッシュ (George H. Bush, 1946-, 在任 2001-09) が 2000 年に民主党大統領候補のアル・ゴア (Al Gore, 1948-) と大統領選挙を争ったとき、勝敗を決したのはオハイオ州の宗教的保守派層が強い地域での票数であったという。

2. 大統領選に宗教論争が登場するようになった背景—ジミー・カーター大統領

それではいつ頃から、大統領選挙における宗教的論争が顕著になり始めたのだろうか？

アメリカの政治に宗教色が濃く出たのは、第 39 代大統領として 1976 年に選出され、1977 年にその職に就いたジミー・カーター (Jimmy Carter, 1924-, 在任 1977-81) である。

その理由は、カーターがアメリカ合衆国大統領として、初めて自らを「新しく生まれたキリスト教徒」(a born-again Christian) と称したとも言える発言を選挙戦中の 1976 年 3 月 16 日にしたからである。

その発言とは、『ボストングローブ』(*Boston Globe*) 紙の記者ロバート・L・ターナー (Robert L. Turner) とのインタビューに見られるものである。

We believe that the first time we're born, as children, it's human

life given to us; and when we accept Jesus as our Savior, it's a new life. That's what "born again" means.⁵

ちなみにこの発言は社会的にかなりの衝撃を与えたようで、手元にある2002年版の *Bartlett's Familiar Quotations* 17th edition にも掲載されている。

このカーターの発言に見られる“born-again”とは、新約聖書ヨハネの福音書第3章第3節“Jesus answered and said unto him, Verily, verily, I say unto thee, Except a man be born again, he cannot see the kingdom of God.”に由来している。

昨今では、この“born again”という表現には「生まれ変わる」という訳語が与えられ、その意味内容は「キリスト教徒が、激しい宗教体験によって、生まれ変わる、つまり信仰を新たにした」ということで、それだけイエス・キリストにコミットした人生を送るということとして捉えられている。

この時代、つまり1970年代に、カーターが大統領としてそうした発言を大統領選挙戦の最中に口にしたことは、1950年代半ば以降の公民権運動における女性の活躍をはじめ、その後の女性の社会参加から生み出された女性解放運動 (Women's Liberation Movement) やフェミニズムを背景として、1973年にアメリカ合衆国連邦最高裁判所が人工妊娠中絶を合法とする判断を下した⁶ことが背景にあったと考えてよいだろう。

人工妊娠中絶を合法化するということは、「生まれ変わったキリスト教徒」(born-again Christian) であることを自認する保守派キリスト教徒にしてみれば、聖書に記されている天地創造説を否定するようなものである。カーターは、キリスト教プロテスタントの教派のなかでも保守派のサザン・バプティスト (Southern Baptist) に所属していただけに、この連邦最高裁の判断には納得していなかっただろう。しかし、ベティ・フリーダン (Betty Naomi Goldstein Friedan, 1921-2006) が著した一冊の本『女らしさの神話』(*The Feminine Mystique*, 1963)⁷の出版をきっかけに1966年に組織された「全米女性機構」(National Organization for Women) を軸とする女性解放運動が一段落し、雑誌『ミズ』(*Ms.*) を創刊したグロリア・スタインム (Gloria Steinem, 1934-) らの努力でフェミニズムが社会に認知される時代にあって、連邦最高裁の判断に真っ向から対立するような「人工妊娠中絶反対」を声高に叫ぶことは、時代の先端を行く女性たちをはじめリベラル派の票を失うことを

意味した。それよりも、自らの立場を born-again Christian として明確化することによって、最高裁の判断に距離を置く方がはるかに賢明な姿勢であっただろうし、社会改革を前面に打ち出す民主党の代表としての意識があったのだろう。

3. アメリカ合衆国政府の宗教的あり方—キリスト教プロテスタント保守派

しかし、ジミー・カーターよりもおよそ 20 年も前に、現職の大統領がアメリカの政治のあり方について宗教的に規定した事実がある。私たち日本人にしてみれば、政教分離という立場からどう判断してよいのか戸惑う発言であった。

その大統領とは、第二次世界大戦時、ノルマンディー進攻 (Invasion of Normandy, 1944) で活躍し、第 34 代大統領となったドワイト・D・アイゼンハワー (Dwight D. Eisenhower, 1890-1969, 在任 1953-61) である。アイゼンハワーは、大統領となった翌年の 1954 年 6 月 14 日、国旗制定記念日 (Flag Day) に、次のようにアメリカ合衆国政府のあり方を語ったのである。

Our government makes no sense unless it is founded on a deeply felt religious faith and I don't care what it is. With us, of course, it is the Judeo-Christian concept, but it must be a religion that all men are created equal.⁸

このアイゼンハワーの発言は、第二次世界大戦後に世界の超大国となった米ソ二国間の関係を意識しての発言であることは間違いない。だが、アイゼンハワーが所属していた教派を考慮すると、ただ単に宗教を認めようとしめない共産主義国家ソヴィエトへの牽制球だったとは思えない。アイゼンハワーが所属していた教派「エホバの証人」(Jehovah's Witness)⁹ は、聖書が神のことばであることを信じ、また信仰そのものが聖書に根ざしていなければならないとしている。このことを考えれば、政治家として「宗教的信念」を固定化することは憲法違反になるため、「宗教的信念は何であってもいい」と付け加えているのであって、アイゼンハワー自身が聖書重視派であることを否定することはできないだろう。聖書に記されている通りの生き方をする。それをアイゼンハワーは政治の土台に取り込み、キリスト教国家としてのアメリカの土台にもしようと

したのだ。だが、その目的は案外身近にあった。

第二次世界大戦後のアメリカ国内を見れば、経済学者、ジョン・K・ガルブレイス (John K. Galbraith, 1908-2006) が評したように「豊かなる社会」(Affluent Society) を迎え、体制順応派はその豊かさにどっぷりと身を沈め、日々の安穩たる生活を享受していた。その一方で、彼らの子弟はそうした親の生き方に嫌悪し、原爆開発に基づく核の利用やテクノロジーの発展を大量生産・大量消費のために利用することが原因での人間圧殺的風潮を否定する反体制的文化を生み出す原動力として動き出していた。アメリカはまさしく「疾風怒濤の時代」に入っていたのである。

プレスリー (Elvis A. Presley, 1935-77) が白人文化のカントリー・ウェスタンと黒人文化のリズム・アンド・ブルースとを融合した新しい音楽を創り出し、結果的には、それまでの時代であれば否定されていた黒人文化を白人の若い世代が羨望視するようになっていた。また親の世代の体制どっぷり型の生き方に辟易した知的レベルの高い一群の若者が、新たな文学ジャンルの構築を始めた。

刊行後すぐに、猥褻が理由で発禁に追い込まれるほど若い世代に訴えるものがあった詩『吠える』(Howl, 1956) を発表したアレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg, 1926-97)、大学をドロップアウトして放浪した体験を土台に書き上げた自伝的小説『路上』(On the Road, 1957)¹⁰ で、やはり若い世代に多大な影響を与えることになったジャック・ケルワック (Jack Kerouac, 1922-69)、京都大徳寺に禅を学んだゲアリー・シュナイダー (Gary Snyder, 1930-)、『ジャンキー』(Junkie, 1953) を世に送り出し、その後麻薬体験による幻覚状況を綴った作品『裸のランチ』(The Naked Lunch, 1959) で一躍名前を上げた William S. Burroughs (1914-97) らに代表されるビート世代 (Beat Generation / Beatnik) 文学である。

こうした反体制、反伝統、反良俗的な新しい風潮というか、文化革命に歯止めをかけなければならないことも、国家・国民を指揮していく立場にあったアイゼンハワーにはあったはずだ。

また人種問題が大きくクローズアップしてくるのもこの時代である。

1954年には19世紀末以来合憲とされてきた「分離すれども平等」(separate but equal)¹¹ に連邦最高裁判所が終止符を打ち、その潮流に乗るかのように、「全米有色人種向上協会」(NAACP / National Association for the Advancement of Colored People) の援助を受けて、翌年、一介の裁縫師ローザ・パークス (Rosa

Parks, 1913-2005) が黒人差別バスの乗車拒否運動 (Montgomery Bus Boycott) のきっかけをつくり、公民権運動が大々的に始まったのである。

この疾風怒濤の時代¹²の所産として、伝統や因習に縛られない生き方が尊いものであるという考え方が定着した。ビート世代から、その風潮を引き継いだヒッピーたちの文化のなかで、性を誰にも気兼ねせずに楽しむ文化、異性愛はもとよりキリスト教では否定されている同性愛もエイズというどうにもならない病気を防ぐ一つ的手段として認めざるを得ない状況が生み出された。女性解放運動やフェミニズム運動によって男女が平等になり、また子どもを生む、生まないは、女性の権利となった。

こうした文化はどれ一つをとっても、キリスト教プロテスタントの保守派にとっては厄介者になった。また、本当にそれでよいのか、という問題がアメリカ社会の地下に脈々と流れてきている。そのために政治的に保守路線を守ろうとする共和党は、こうしたキリスト教的価値観にかかわる問題を大統領選に持ち出すようになったのである。

4. アメリカ人であることの証明 — 「我らは神を信ずる」 (In God We Trust)

そこには国家をかけたの問題も含まれている。

アメリカ人とは誰か？ 18世紀以来、アメリカ合衆国に国籍をもつ人であれば誰もが一度は自らに問いかける疑問である。また、アメリカを、アメリカの文化を研究する者が一度は必ず目を通さなければならない資料にクレヴクール (Jean de Crevecoeur, 1735-1813) の『あるアメリカ人農夫からの手紙』 (*Letters from an American Farmer*, 1782) の中の一節がある。

What then is the American, this new man? He is either an European, or the descendant of an [*sic*] European, hence that strange mixture of blood, which you will find in no other country. I could point out to you a family whose grandfather was an [*sic*] Englishman, whose wife was Dutch, whose son married a French woman, and whose present four sons have now four wives of different nations. *He* is an American, who, leaving behind him all his ancient prejudices and manners, receives new ones from the

new mode of life he has embraced, the new government he obeys, and the new rank he holds. He becomes an American by being received in the broad lap of our great *Alma Mater*. Here individuals of all nations are melted into a new race of men, whose labours and posterity will one day cause great changes in the world. Americans are the western pilgrims, who are carrying along with them that great mass of arts, sciences, vigour, and industry which began long since in the east; they will finish the great circle.

この一節は、アメリカ人のアイデンティティについて語る時、長らく誰もが引用する箇所であった。しかしアメリカへの移民が、もっぱらヨーロッパ諸国からだけであった時代ならともかく、現在のように、アジアからも中南米からも移民が押し寄せる時代にあっては時代錯誤の引用となってしまうだろう。

同志社大学の森孝一は、その著書『宗教から読む「アメリカ」』（講談社選書メチエ）をはじめ、その他の論文において「アメリカ人には共通の過去がない」、それゆえ「見えざる国教」としての宗教に一体感を持つことでアメリカ人であることを規定している、といった旨のことを開陳している。これはアメリカの宗教学者ロバート・N・ベラー（Robert N. Bellah, 1927-）が言うところの「市民宗教」（civil religion）とも密接に関係している。すなわち「神」の存在を認めるといふ国民一般が共有する気持ちを抱いていることに一体感をもつ。それこそアメリカ人である、という考え方だ。非常に的確な指摘である。アイゼンハワーのことばを借りれば、宗教的信念は何であってもかまわないが、宗教は大切であり、神の存在を認め、また信じる者がアメリカ人である、ということだろう。したがって、アイゼンハワー政権下の1956年、In God We Trust「我々は神を信じる」がアメリカのモットーになっている。しかも、私たち日本人にしてみれば信じられないことだが、この文言が紙幣に印刷され、また貨幣に刻印されているのである。

この文言が活かされている映画が、1997年にリリースされた『コンタクト』（*Contact*）である。この映画はアメリカの名門大学コーネルの教授でSF作家であったカール・E・セーガン（Carl E. Sagan, 1934-96）の小説を映画化したものであった。この映画の中で、地球外生命体を発見した科学者が「神の存在」を認めないために、アメリカ合衆国国民の代表として、地球外生命体との

コンタクトを取ることが許されない場面が描かれている。その理由は、当時の統計で行けば、95%の国民が神の存在を認めている¹³というのに、その存在を認めない者がアメリカ国民を代表することはできない、ということであった。

それほどにアメリカ人にとっての神、これにまつわる宗教は自らのアイデンティティにまでかかわる事柄なのである。上に引いた、アメリカのモットーは「アメリカ国民は神を信じている」ことを表しているのである。この事実は、幼いときからいわばDNAになるように埋め込まれる。その良い例が小学生のときから国旗に向かって斉唱する「忠誠の誓い」である。

I pledge allegiance to the flag of the United States of America,
and to the Republic for which it stands, one nation under God,
indivisible, with liberty and justice for all.

「忠誠の誓い」を小学生に唱えさせることについては、「神のもと」(under God) という文言が入っているため、「政教分離」の原則を破るものではないか、と問題になってきている事実はあるが、現在にいたるまで行われている。

では、なぜそこまで神に拘るのか？ それは既に触れたようにアメリカ人のアイデンティティにかかわる問題だからだ。In God We Trust、このモットーに表されているように「神を信じる者」がアメリカ人なのである。

5. 聖書のことばに基づいて建設された国家—アメリカ

「神を信じる者」がアメリカ人である、という考え方の出発点は、390年、380年前に遡る植民地時代にある。

一つには、英国のプリマスを出航したウィリアム・ブラッドフォード(William Bradford, 1590-1657)を指導者とする102名の内41名が署名したと言われる「メイフラワー誓約」(Mayflower Compact)に記されている。

Having undertaken, for the Glory of God and advancement of
the Christian Faith and Honour of our King and Country, a
Voyage to plant the First Colony in the Northern Parts of Virginia,
do by these presents solemnly and mutually in the presence of God

and one of another, Covenant and Combine ourselves together into a Civil Body Politic.

この人たちが新大陸に上陸して 200 年たった 1820 年、その記念式において、当時ホイッグ (Whig) 党の指導的立場にあったダニエル・ウェブスター (Daniel Webster, 1782-1852) が、アメリカ人の祖先として彼らをピルグリム・ファーザーズ (Pilgrim Fathers) と称した。つまりこの時点でのアメリカ人とは、キリスト教信仰を増進する役目を担って 1620 年に、現在のマサチューセッツ州ブリマスに上陸した人たちの子孫である、と規定したのである。

1630 年には、ピューリタンがジョン・ウインスロップ (John Winthrop, 1588-1649) を指導者として上陸した。そのとき¹⁵、ウインスロップは「キリスト教徒の慈愛のひながた」(‘A Model of Christian Charity’) という説教のなかで、次のような文言を残している。

For we must consider that we shall be as a city upon a hill. The eyes of all people are upon us. So that if we shall deal falsely with our God in this work we have undertaken, and so cause Him to withdraw His present help from us, we shall be made a story and a by-word through the world.

この文言のなかの “a city upon a hill” は、聖書の「マタイによる福音書」第 5 章第 14 節にある “Ye are the light of the world. A city that is set on a hill cannot be hid.” に拠るものである。

この文言は 331 年後の 1961 年、大統領に就任したジョン・F・ケネディ (John F. Kennedy, 1917-63, 在任 1961-63) が引用している。ケネディがカトリック教徒であることを考えると、実に興味深いところでもある。ケネディは組閣にあたって何を指針にしたかについて、次のように述べている。

Allow me to illustrate: During the last sixty days, I have been at the task of constructing an administration. It has been a long and deliberate process. Some have counseled greater speed. Others have counseled more expedient tests. But I have been guided by

the standard John Winthrop set before his shipmates on the flagship Arbella three hundred and thirty-one years ago, as they, too, faced the task of building a new government on a perilous frontier. “We must always consider,” he said, “that we shall be as a city upon a hill—the eyes of all people are upon us.” Today the eyes of all people are truly upon us--and our governments, in every branch, at every level, national, state and local, must be as a city upon a hill--constructed and inhabited by men aware of their great trust and their great responsibilities. For we are setting out upon a voyage in 1961 no less hazardous than that undertaken by the Arabella [sic] in 1630.

また、その38年後の1989年には、第40代大統領ロナルド・レーガン(Ronald Reagan, 1911-2004)が大統領職を離れるにあたって行った演説に、やはりウィンスロップの文言をキリスト教保守派の教会¹⁶に所属していた大統領らしく「輝ける」(shining)という形容詞をつけて更に美化した「丘の上の町」に変えて引用しているところが興味深い。

The past few days when I've been at that window upstairs. I've thought a bit of the 'shining city upon a hill.' The phrase comes from John Winthrop, who wrote it to describe the America he imagined. What he imagined was important because he was an early Pilgrim, an early freedom man. He journeyed here on what today we'd call a little wooden boat: and like the other Pilgrims, he was looking for a home that would be free. I've spoken of the shining city all my political life, but I don't know if I ever quite communicated what I saw when I said it.

この「丘の上の町」としての生き方、「世の光」としての生き方、これこそアメリカ人の理想的なあり方なのである。したがって、彼らから神を、宗教を引きはがすことはできない。

6. おわりに 一副大統領の宗教・教派に宗教的論争があった

にもかかわらず、オバマとマッケインとの間に行われた大統領選挙戦においては、それまでのように明確な形で宗教的論争が行われていたことが報道されることはなかった。それは100年振りといわれる経済の落ち込みによるところが大きかった。だから表だって宗教的な話が聞こえて来なかったにしか過ぎない。

現実には宗教的な色彩が色濃く出ていた部分があった。それが明確になったのはマッケインが、それこそアメリカでもその名があまり知られていなかったアラスカ州知事のセアラ・ペイリン (Sarah Palin, 1964-) を副大統領候補に選んだ時である。

ペイリンはキリスト教プロテスタントの一教派「アセンブリーズ・オブ・ゴッド」(Assemblies of God) の会員である。

この教派の歴史は浅い。1914年に創設されたペンテコステ派の集会である。1910年代と言えば、ロサンジェルス聖書協会 (Los Angeles Bible Institute) を組織していた実業家でユニオン・オイル (Union Oil) 会社の創設者ライマン・スチュアート (Lyman Stewart, 1840-1923) と兄のミルトン (Milton Stewart, 1838-1923) が反自由主義神学の立場からのパンフレット『ザ・ファンダメンタルズ』(*The Fundamentals*) を1910年から15年にかけて全12巻を発行している。その理由は、19世紀半ばにチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) が『種の起源』(*On the Origin of Species*, 1859) を発表し、その後『人間の由来』(*The Descent of Man*, 1871) を発表することによって聖書に記されていることへの疑問が沸騰することになったことが上げられるだろう。ダーウィンの進化論を支持する人たちはモダニスト (modernist) と呼ばれ、宗教においては自由主義神学の立場がクローズアップされる状況となった。これに対抗するかたちで聖書を無謬視する立場を採る人たちが改めて登場したのである。

こうした状況の下で組織されたのが「アセンブリーズ・オブ・ゴッド」で、既に述べたようにペンテコステ派の集会であり、聖書無謬派 (inerrantist) の集団であると言ってよい。信者の表に現れる特徴として、聖霊のバプテスマを受けることでエクスタシー状態に陥るとか、いわゆる霊的な高まりのなかで跳んだり跳ねたり、踊ったりする行為とか、回りの人たちには何を言っている

のか理解できないことをつぶやく、いわゆる異言 (glossolalia) 現象がある。

聖書無謬派ゆえに人工妊娠中絶など考えることすら罪となるし、女性が男性の支配下にあることなど極めて日常的なことであり、同性愛は考えられない行為になる。

大統領選挙戦の最中もその後も、ペイリンの長女が婚前妊娠をしたことが報じられたが、ペイリンはどこ吹く風とやりすぎし、結果的に長女はシングルマザーになった。それは、神様が子どもを授けてくださったものである、という考え方に基づいているのである。またこの手の人たちは、未だにアメリカの教育現場で話題になるチャールズ・ダーウィンの進化論をどう扱うかについても、天地創造説を問答無用で前面に押し出す人である。

マッケインは全米のキリスト教保守層を狙ったのである。共和党は従来、その傾向が強かったが、ペイリンを副大統領候補として選んだ狙いが明確になっている。

ではオバマはどうか？

オバマは実に賢いと言うしかない。wise、clever、shrewd、いや wily という表現がピッタリかもしれない。ただ「賢い、賢明だ」では言い表せないところがあるがあるからだ。その理由は、オバマが副大統領候補に選んだのがジョウゼフ・R・バイデン (Joseph R. Biden, Jr., 1942-) だからだ。

バイデンの民族的宗教的背景を見ると、アメリカの大統領、副大統領史においては非常に珍しいところがある。その祖先がアイルランド出身で、カトリックなのだ。バイデン自身、ローマカトリック教徒である。

これまで 44 代にわたる歴代の大統領、副大統領に無宗教を標榜する者は何人かいるが、ケネディをのぞくと、すべての大統領、副大統領がキリスト教プロテスタントで占められている。ちなみにバイデンの母方の姓は、フィネガン (Finnegan)。フィネガンといえばアイルランドの俗謡に登場する鬍を生やした男であり、アイルランドが産んだ最大の作家ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) の作品『フィネガンズ・ウェイク』 (*Finnegans Wake*, 1939) からも、すぐにアイルランド系とわかる家系である。

オバマは、自身はキリスト教プロテスタントの一教派「統一キリスト教会」 (United Church of Christ) に所属している。大統領選に登場したとき、所属教会の牧師が過激な発言をすることで話題になったが、この教派はビート世代が台頭する 1950 年代に登場する教派で比較的反リベラルである。そのオバマが

バイデンを副大統領候補（現副大統領）にしたという事実は何を意味しているのだろうか？

民主党ゆえ、不景気に襲われず、宗教的論争に火がついたとしてもカトリックの副大統領候補を立てておけば、人工妊娠中絶是非論争や同性愛是非論争に対して自ずとスタンスを示していることになるだろう。だが、そんなことではない。

ケネディが暗殺された後、大統領になったのは、副大統領のリンドン・B・ジョンソン（Lyndon B. Johnson, 1908-73）であった。所属教派はなんと「ディサイプルス教会」（Disciples of Christ）であった。この教派は聖書を信仰の唯一の拠り所としている。また洗礼も全身浸水で行われる保守派である。ケネディ亡き後は、またキリスト教プロテスタントの大統領ということで国民が安心感を抱いたというのは言い過ぎだろうか？アメリカにおけるカトリックは、その二重忠誠的生き方（カトリック教徒はヴァチカン公国への忠誠も誓わなければならない）はもとより、アメリカ人にとっては汚れた宗教として永年存在したことは否めない事実である。だからこそアメリカ国内においてカトリック教徒は永年虐げられてきたのである。

ところがオバマがバイデンを選んだのは、有色人種としての自らが、あるいは凶弾に倒れることがあるやも知れぬと想定した場合、カトリック教徒を副大統領にしておけば、自らの後継者はアメリカで永年冷や飯を食わされてきたカトリックになる。これほどオバマにとって小気味よい事実はないのではないか。そう思えてならない。

100年振りの不景気に襲われたことが功を奏して、表だった宗教的論争はなかったが、裏を返せば、あったと言えるだろう。まだまだアメリカ人から宗教を、神を、切り離すわけにはいかない。いついかなるときに“In God We Trust”が“one nation under God”が、またキリスト教国家としての意識が維持され続けるなら人工中絶や同性愛、同性婚、進化論論争が登場するか予測できない。オバマ対マッケイン戦はそうした条件での大統領選挙戦だったのである。

2012年秋の大統領選に共和党から登場する候補者のなかで有力だと、今のところ評されているのは前マサチューセッツ州知事のミット・ロムニー（Mitt Romney, 1947-）と連邦上院議員のリチャード・サントラム（Richard Santorum, 1958-）の二人である。ロムニーはモルモン教徒であり、サントラ

ムはカトリック教徒で、これまでの共和党における候補者選に非常に珍しいことが起きている。

今、初校を読んでいる段階ではいずれが共和党候補になるのか予想のつけようがない。ロムニーが優勢だという下馬評がもっぱらだが、カトリックのサントラムへの支持が多いのは、サントラムがカトリックゆえとはいえ、宗教的にきわめて保守的な姿勢を打ち出しているからにほかならない。その姿勢がプロテスタント保守派の票を得ているのである。一方、かつては一夫多妻を認めていたがゆえに追われ追われて現在のユタ州ソールト・レイクに拠点をもつようになったモルモン教の会員、ロムニーに支持が集まるのは、いつまでたっても経済状況好転への見通しがつかず、失業率が高まることへの不安から彼の財政・経済政策の手腕に期待するところが大きいからであろう。

しかし、いずれが共和党の候補になろうとも副大統領候補にどのような宗教的背景の人を選ぶか、興味深いところである。あるいはプロテスタント志向に、いや宗教そのものに翳りが見え始めているのかもしれない。

註

1. 建国以来、アメリカ文化には常に change と growth とが欠かせない要素であったことはジョージ・ワシントン大学で教鞭を執られ度々来日されていたロバート・ウォーカー (Robert Walker) 教授が、その著書 *American Society* で指摘されている。change and growth を、アメリカ版ロマンティシズムを取りあげ、次のように述べている。This philosophy was perfectly suited to the condition and aspirations of young America. It rejected the static, the accumulation of culture, the reverence for the past, and the unchanging hierarchies which the American readily associated with Europe. In its place, romanticism stressed growth and change, diversity and individual differences, quantitative measures and the future itself. (p. 36)

また同書の結論の部分にあたる場所では、by scientific discoveries and technological applications という句に伴われるのだが、It (The nation) will expect change to be a constant condition, …と述べている。オバマは

こうした文化がアメリカ人国民性となっていることを重々承知したうえで
のキャンペーンを展開していたのである。

2. この法案は過去において何人もの大統領が挫折してきた法案ゆえに評価
が高いところがあるが、現実には同法廃止運動も続いているし、州によっ
ては「全国民に保険加入を勧めることは憲法違反」と連邦政府を提訴し
ているところもある。
3. <http://religions.pewforum.org/affiliations> US.Religious Landscape
Study, Nov. 9,'11
4. <http://religions.pewforum.org/affiliations> このサイトに掲載されている
データは、手元のやや古い資料 Schaefer, Richard T. (2000). *Racial and
Ethnic Groups*. Upper Saddle River, New Jersey: Rentice Hall. に掲載されて
いる 1998 年の資料から判断して妥当性があると判断しているため、これを
利用する。
5. [http://b27.cc.trincoll.edu/weblogs/AmericanReligionSurvey-ARIS/reports/
ARIS_Report_2008.pdf](http://b27.cc.trincoll.edu/weblogs/AmericanReligionSurvey-ARIS/reports/ARIS_Report_2008.pdf). Retrieved 2009-04-01. (April 19, '10)
6. 「ロウ対ウェイド事件」(Roe vs. Wade) を参照されたい。人工妊娠中絶
を 7 対 2 で合憲とする判断が、1973 年にくだされたが、この問題は未だ
に国論を二分している。賛成派を pro-choice と呼び、反対派を pro-life と
呼んでいる。
7. 邦訳タイトルは『新しい女性の創造』(大和書房)
8. Silk, Mark (1984). Notes on the Judeo-Christian Tradition in America,
American Quarterly 36 (1), 65-85
9. アイゼンハワーは後に Presbyterian (長老派) へ所属を変更している。大統領
のなかには、大統領に就任すると同時に所属教派を変更したり、オバマ大統領
のように就任後、所属していた教派を脱会し、いずれの教派へも所属しな
かったり、レーガン大統領のように、大統領職を離れると同時に就任中
の教派 (Disciples of Christ) を脱会して他の教派 (レーガンの場合は長
老派) へ所属したりすることがある。
10. 新しい邦訳は原題通りの『オン・ザ・ロード』(河出) となっている。
11. 「プレッシー対ファーガソン事件」(Plessy v. Ferguson) として知られる
裁判で、アメリカ合衆国連邦最高裁判所が 1896 年、鉄道の黒人乗客にた
いて「分離するが平等な」(separate but equal) 施設を提供すること

は憲法修正第 14 条の「法律の平等な保護」(equal protection of the laws) の条項に違反していないという判断を下していた。これがその後ブラウン裁判に至るまで white only を正当化していた。

12. 1950 年代からのアメリカを見ると私たちが注意すべきは、あらゆる意味での少数派の活躍が目立つことである。ビート世代と呼ばれる文学者にフランス系カナダ系アメリカ人のケルアック、ユダヤ系のギンズバーグ、女性解放運動の魁となるフリーダン、その跡を継ぐスタイネムが女性という少数派であると同時に、二人ともユダヤ系であること、また公民権運動の魁となるブラウン裁判の中心人物は有色人種であるばかりでなく当事者がブラウンの小学校 3 年生になる娘リンダ (Lynda) であったこと、本格的公民権運動を起すきっかけをつくったのもローザ・パークスという女性であったことに注目すべきである。こうしたあらゆる意味での少数派が台頭してくることで、その後のアメリカが大きな変化を遂げることになった。そうした状況に保守派がさまざまな危惧を抱くのは当然のことで、この派の人たちへの配慮を大統領がすることを考慮に入れることは許容されるであろう。少数派への梃子入れを図ったジョン・フィッツジェラルド・ケネディ (John Fitzgerald Kennedy, 1917-63)、弟のロバート (Robert, 1925-68) は共に暗殺されている。
13. Princeton Religious Research Center が毎年調査している結果に基づいている。同研究所が発行した *Religion in America 2002* では 87% と 8 ポイント下がっているが、2000 年の段階では 95% を維持していた。また、森孝一は論文「統計からみるアメリカ宗教の現状と特質」(森孝一編『アメリカと宗教』国際問題研究所、1997) において、1952 年 99%、65 年 97%、76 年 94%、86 年 94%、95 年 96% という推移を掲載している。
14. 「神の下の一つの国家」(one nation under God) という部分が、政教分離原則に違反しているということで憲法違反の判断が 2002 年 6 月 26 日にサンフランシスコの連邦控訴裁判所で下されたが、翌日、判決の効力を停止する決定が下されている。
15. ウィンスロップの「キリスト教徒の慈愛のひな形」はアーベラ号上で書かれ、ボストンに上陸する前に読まれたというのが一般的な考えだが、大西直樹によれば (『資料で読むアメリカ文化史①』 p. 86)、英国のサザンプトン港を出港する直前に集まった会衆の前に読まれたとする説が有

力だそうである。たしかに「メイフラワー誓約」のようにわずか 196 語で書かれた短いものであり、また上陸する人の数が 100 名たらずであれば、上陸前に船の上で読まれたことには信頼性があるが、「キリスト教徒の慈愛のひな形」のように 6000 語を越す長いものであり、またアーベラ号が率いてきた移民の数が 1,000 人という数になると、これを上陸前に読み上げたという事実には疑問をもたざるを得ない。

16. レーガン大統領が大統領職を退くまえに所属していた教派は 1809 年にトマスとアレグザンダー・キャンベル (Thomas, 1763-1854 and Alexander, 1788-1866 Campbell) によって組織されたディサイプルス教会 (Disciples of Christ) であった。聖書を信仰の唯一の拠り所とする教会で、正式名はキリスト教会 (Christian Church)。

